

学術講演会の紙上開催を経験して

高井 義 造

大阪大学大学院工学研究科物理学系専攻



大阪で開催する予定であった2020年度の顕微鏡学会第76回学術講演会の集会が中止となりました。今年の3月末の時点でプログラム編成までの全ての準備を終了しておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大が進む中において、会員や関係者の皆様ならびに社会全体の安全と安心の確保が大事であると判断し、集会を中止して紙上開催とすることを4月初めに決断しました。会員や関係者の皆様には大変なご迷惑とご負担をおかけすることになり申し訳なく思っております。

人と会って話を聞いて交流するというごく当たり前のことができなくなった時、私達は当たり前にできていたことの大切さを思い知らされます。今回の場合は、それが命に関わる問題であり、広い地域において同時多発的に発生したことで事態が深刻になりました。

人と会って話を聞いて交流するというごく当たり前のことができなくなった時、私達は当たり前にできていたことの大切さを思い知らされます。今回の場合は、それが命に関わる問題であり、広い地域において同時多発的に発生したことで事態が深刻になりました。

この事態を改善することに大きく貢献したことのひとつとして、情報通信技術の活用が挙げられます。この技術進展は以前から着々と進められてきたわけですが、今回のように直接会うことが制限されるという条件が重なって、大きな注目を集める結果となりました。今、大学内で実施する講義や会議も、感染拡大を防止する観点から、大部分が遠隔で行われています。もちろん100%満足できるような結果は望めませんが、なんとか合格点はもらえるレベルで実施できているように思います。この状況は我々の意図しないところで起こってしまいましたが、実際に遠隔講義等を実行してみると思わぬメリットもそこにあることに気づかされます。例えば、人とのコミュニケーションが苦手な学生も遠隔講義なら、なんとか参加できるといったメリットもあります。会うことを物理的に避けなければならないという条件、まさに物理学分野という境界条件（前提条件として制約を与える）を変更することで、新しい解や新しい対処法が開け、加えて新しいメリットを享受できる可能性もあることを認識できたのは、禍の中での1つの収穫であったように思います。

学会活動においても、「会って情報交換する」という通常のスタイルを取り払うと、新しい可能性が広がる部分があるかも知れません。今回は準備期間が絶対的に足りないという理由から、残念ながら紙上開催にとどまりましたが、今後は一歩進めて、Webを活用した学術講演会の新しい形を準備しておくべきであり、その絶好のチャンスが今到来しているとも言えます。シンポジウム講演や一般講演等は大人数の会議システムを利用すれば質疑応答を含めて今でも実施可能な段階にあり、ポスター講演もやり方を工夫すれば大変面白い

仕組みを構築できるように思います。市民公開講座やワークショップも開催可能です。ポスター賞や写真賞の選考は今回においてもトライアルとして実施してみました。十分Web上で実施可能です。企業展示も、オンライン展示Webサイトを開設し、新商品の紹介とセミナーをWeb開催している実施例が既にあります。懇親会ですら面白いアプリが開発されれば、可能なような気がします。また、オンライン開催すれば、経理的な側面でも大きなメリットが期待できます。但し、多くの皆さんが懸念されるように、オンライン開催により、学会活動そのものが低調になるようでは話になりません。そうならないためにはオンライン開催に対する我々の意識改革が何よりも重要であると思われます。コロナ禍が収まった状況下でもオンラインの良さが支持されるようであればなりません。今多くの国内会議や国際会議でオンライン開催の準備が進められています。秋口からは続々と実施されると思われませんが、新しいスタイルの学術講演会が少しずつ定着していく可能性もあります。

このような状況を通して感じることは、研究活動においても我々は常に様々な困難と限界に直面しているわけですが、その解決法を常に模索しながら進めているという点では、両者の間に相通じるところがあるように思います。困難や限界を突破するために、長い時間をかけて、まさしく「研いで突く」研究活動を、信念を持って継続することも大切なことですが、一方で見方を大きく転換させて、全く新しい考え方や手法を導入して、新しい境界条件の下で再検討することも重要と思われます。研究の方向を大きく変更させるような画期的なアイデアがそこから生まれる可能性もあります。私達はそういった技術の相乗効果（Synergy）を期待して、今回の学術講演会では「シナジェティック・マイクロコピー」というテーマを掲げました。ひょっとすると、顕微鏡法とは全く異なる技術とのシナジーが大きくマイクロコピーの世界を変えることになるかも知れません。常にそんな眼で様々な技術にも目を向け続けていることが、将来の新しい発見や進展に繋がる原動力になると信じます。

学術集会を中止し、紙上開催に切り替えることを経験して、あらためて顕微鏡学会が産学官連携の強い学会であることを目の当たりにしました。経理的には大きな赤字が出るのが当初想定されておりましたが、紙媒体の要旨集の発行を断念しWeb要旨集に変更すること等で必要経費を削ぎ落とし、皆様には参加費納入のご協力をお願いし、展示各社様には有志という形で10%の会場準備金に対するご協力をお願いすることで、赤字決算を回避することができました。これもひとえに皆様方の暖かいご協力とご支援の賜物であり、感謝に堪えません。ここに深甚の謝意を表します。

高井義造 (Yoshizo Takai)

- 1978年 大阪大学工学部応用物理学科卒業
- 1983年 大阪大学大学院工学研究科応用物理学専攻博士課程修了、工学博士
- 1983年 TDK株式会社開発研究所
- 1987年 マサチューセッツ工科大学客員研究員
- 1990年 大阪大学工学部応用物理学専攻助教授
- 1999年 大阪大学大学院工学研究科物質・生命工学専攻教授
- 2005より生命先端工学専攻、2020より物理学系専攻に所属換え 現在に至る
- 2000年 日本電子顕微鏡学会賞（瀬藤賞）
- 2007年 和文誌「顕微鏡」編集委員長
- 2020年 第76回学術講演会実行委員長